

—帰化植物雑感 追記—

# 帰化植物とのつきあい

高橋 務

## [1]アカツメクサ

アカツメクサは、私が採集した初めての帰化植物として印象深い。中学生の時に岩野俊逸先生に植物採集の手ほどきを受け、八石山へ植物採集に行き久ノ木峠を越えたところで採集したのである(No32, 1947. 8. 2.)。

その時、同定して下さった先生から、アカツメクサが帰化植物であること、外国生まれの植物が他にもいろいろあること、交通便利な都会地に外国から侵入し地方に分布が広がることなど、基本的な帰化植物の知識から、アカツメクサが柏崎から鯖石郷まで来ているが峠を越えて小国郷にはまだ入っていないことなど教えられた。

当時、第二次世界大戦後間もない頃で、帰化植物といっても、明治維新後の外来植物が主なもので、外国との交流の増加や宅地造成・開発など大規模な自然改変にともなう帰化植物の爆発的な増殖も問題にはなっていなかった。

その時は、帰化植物という名と道端の植物が自然に峠を越えるのに何年かかるだろうかということにちょっと関心をもっただけであった。

※1 アカツメクサ:小国生物友の会「かたこ」第8号、昭和62年(1987)に加筆。

## [2]セイヨウタンポポ (写真1)

大学卒業後、北海道幌加内農業高等学校に勤めた。



写真1 放牧地のセイヨウタンポポ北海道幌加内(1960)

学校は町立の農業高校のため、町の農業に立脚した教育課程でホームプロジェクト(HP)を重視していた。季節定時制で生徒登校日でない時には、HP指導の生徒の家を自転車やバイクで回るので、町内の植物・植生を見て歩くのに都合

よかった。

遠く離れた生徒の家に行く路傍には、アカツメクサ(レッドクローバー)、オオアワガエリ(チモシー)、カモガヤ(オーチャドグラス)、ナガハグサ(ケンタッキーブルーグラス)など、牧草が野生化したものが繁茂していた。

長く厳しい北国が春を迎えて緑の明える頃、広い牧草地、放牧地が華やかな黄色の絨毯を敷いたように咲くセイヨウタンポポの群落は強烈な印象で、日本の心象風景の中の“たんぼぼ”とは違っていた。

北海道では、身近な植物に帰化植物の占める割合が極めて大きいことを知って、帰化植物に対する関心を深めることになった。

## [3]ヒゲガヤ (写真2)

昭和55年(1980)4月、登坂裕一さんからイネ科植物の標本を「ヒゲガヤ」と思うが確認してほしいといわれた。ノギの長い特徴のある姿は、見覚えがあるが、和名は思い出せないといったら、長田武正著:原色日本帰化植物図鑑(保育社)に見見者として名前が出ているという。



写真2 ヒゲガヤ和島村辺張(1980)

そう云われて、手元にある図鑑を見たら、「ヒゲガヤ」が掲載されており、[備考]欄に“久内が北海道幌加内町の標本(高橋務、1960)をもとに学名と和名は大井博士によるとして報告した。”と記載されていた。それまで「ヒゲガヤ」が図鑑に載っていることに気づかずにいたのである。

確かに、標本はヒゲガヤであった。

ヒゲガヤは、北海道幌加内農業高等学校に勤めていた時、クラブ活動で町内の植物を採集調査していた折りに、校地



で見つけたイネ科植物を種名不明のまま国立博物館のおし葉展に出品したところ同定(学名)され、和名『ヒゲガヤ』と命名されて発表された(国立博物館:第25回おし葉展出品目録、1961)。

ヒゲガヤは、北海道の他に、千葉、神奈川、岡山に、稀に帰化しているという、登坂さんの採集は新潟県の初めての記録であった。

後に、登坂さんの示した地図をたよりに三島郡和島村の採集地を訪れ、西山丘陵の山麓の道路わきで、20年ぶりに再会することができた。

現在、県内、佐渡に数箇所生育地が見ついている。

※2 ヒゲガヤ再見:新潟県生物教育研究会『たより』36号、1980. 12. 1. に加筆

#### [4]セイトカアワダチソウ (写真3、分布図)

近年、身近な所でのセイトカアワダチソウの増殖はすさまじい。



写真3 加茂川下流域のセイトカアワダチソウ  
加茂市諏訪ノ木(1996)

近辺では、堤防改修工事の行われた加茂川河岸ばかりでなく、住宅地の空地や道端にも多くなっており、山地の林道沿いに奥まったところで出会うこともあって驚くことがある。帰化植物は、侵入から増殖、そして最盛期へ、それから、在来種と共存し安定へと変化していくのであろう。

現在、加茂川下流域河岸には、セイトカアワダチソウの大群生がみられ、増殖の最盛期といえる。残念ながら最初の侵入点を特定することも、分布の広がりや経緯も記録されていないが、加茂川下流域の河辺植物を観察した記録では、1977年、1979年、1980年にはセイトカアワダチソウは記録されていない。1984年に堤防改修工事が市街地から下流域に進行、1988年には堤防改修工事で裸地になったところに多いと報告されていることから、侵入は1984年以降であり、15年ほどで加茂川下流全域に密生するようになり、まさに爆発的な増殖といえる。

繁殖力旺盛なセイトカアワダチソウも、現在都会地では

かつての猛威の姿はないという。密生するセイトカアワダチソウ群落も、次第にススキなどが優占する群落に変化していくという。加茂川周辺のセイトカアワダチソウも今後どのような推移するであろうか、消長の激しい帰化植物は地域、場所を限定して種構成や生育量などを継続的に調査することが必要と思う。

※3 新潟県生物教育研究会加茂支部:ツナギガヤ、No. 1(1980)、No2(1981)、No. 5(1988)から引用



図 加茂川下流域のセイトカアワダチソウ分布(1988)  
現在では全域に分布

#### [5]ハチミツソウ

婦化植物雑感(3)『ハチミツソウ』で、三条市のハチミツソウは、人為的に待ち込まれたものと思われるが、三条市には養蜂業者はないので、何処から誰がどのようにして持ち込んだか、という疑問は解決されないと書いた。

その後、その疑問の解決に何か手掛りが得られないか、加茂市の坂井養蜂場を尋ねた。坂井氏は、ハチミツソウの写真を見て、写真の花は見たことがないと云われたが、蜜源植物として持ち込んだというならXさんかな、と思いがけない話をされた。

坂井氏の話では、Xさんというのは、三条市内の金属加工業者で、趣味で蜜蜂を飼って巣箱をを五十嵐川の土手に置いていたというのである。その方はすでに数年前に亡くなったとのことです。残念ながら、ハチミツソウを待ち込んだことを確かめようがありませんが、答えが出たように思います。

坂井氏からは、その外に、養蜂業の苦勞やミツバチを介して農薬汚染のことなど伺うことができた。

また、三条市で採集した新外来植物が、同定され学名が判



明し、和名が確定するまでの経緯を書いた。

外国の植物が侵入する、住み着く、繁殖するということが多くなるのは、外国とのさまざまな交流と交通量の増加、土地改変による在来植生を破壊して裸地を作り出していることが多くなっているからである。そうしたことが多くなっている今日の状況から、今後一層、外来植物と出会う機会が多くなるであろう、一次帰化地とは思われないところでも。

新外来植物が発見され、学名、和名や分類上の所属、原産地が判明して発表することの難しさや問題点について浅井先生が『緑の侵入者たち』に書かれているが、新外来植物に出合い—その前に、出合った植物が外来植物と知るところから—、学名と分類上の所属・原産地を知ることは、一個人として、外国の植物や文献を見ることができないから不可能であり、既に発表されたものでも知ることは難しい。

たまたま、筆者が出合った新外来植物は、国立科学博物館の『おし葉展』に出品して同定され名前を知ることができた。

今後、外来植物は、ますます世界各方面から侵入が多くなるであろうから、最新の外来植物を掲載した「日本帰化植物誌」の出版、新外来植物にも対応できる研究機関としての公共の博物館・資料館の充実、そして、知りたい自然の情報を手軽に利用できるシステムが実現することを期待しているが。

※4 三条市のハチミツソウ：新潟県植物保護協会「新潟県植物保護」第25号、1999. 4月の追記

#### [6] ゴウダソウ (写真4)

初夏、わが家の庭にゴウダソウの花が咲く。



写真4 ゴウダソウ アメリカ、ジョージア州ミルバン(1980)

'68年に現在の地に移り住んだが、その頃、内川定七先生から頂いたもので、日付はないが“ゴウダソウ—ルナリア、コインプラント、1901, 東京美校教授、合田 清、パリ、ゴラン画伯の庭の種子を待ち帰った”と書いた古いメモがあり、頂いたときの開き書きと思われる。

内川先生は、どこから入手したかお聞きしていないが、当時、珍しいものであったのであろう、国立科学博物館：第31回おしば展(1967)に加茂(栽)として出品されており、長田武正：日本帰化植物図鑑(北隆館 1972)に掲載されている同種の図解に引用されたと思われる。

園芸店に“こぼんそう”という名で販売されたことがあるが、国内の逸出して野生化している状況はどんなであろうか。

ところで、そのゴウダソウに思いがけないところで出合った。

'99年春、アメリカを旅行し、アトランタに近いミルバン市に滞在した。

滞在した家は、郊外型の住宅地にあり、約3,000m<sup>2</sup>の宅地の前庭には芝生にユリノキなど数本の高木があり、裏庭はちよとした芝生があってその奥はこんもりした針葉樹林で、朝には林からリスが出てきて芝生を走りまわり埋めた木の実を掘り出して食べていた。その裏庭の林の縁にゴウダソウが散生していた、生育状況から栽培しているものではなく、野生のものと思われる。

ゴウダソウは別名ギンセンソウ(銀扇草)、ヨーロッパ南東部原産で花壇や切り花用に栽培されるが、ヨーロッパ各地や北アメリカでは野生化しているという。

わが家の庭での生育状況は、初夏に総状に紅紫色の花を多数着ける、果実は大さな楕円形で、透けてみえる果実の形を扇に見立てて銀扇草といい、俗に“こぼんそう”というのもその形から呼んだものであろう。果実は熟すると裂開し、地に落ちた種子は秋のうちに発芽し大きな子葉を展開する。翌年は本葉を数枚開き、翌々年茎が伸長して開花する。発芽率は良好で、多数発芽するが、開花に至るまでに数を減じている。これまで隣接する竹林や道端に逸出することはなかった。

ゴウダソウは、ヨーロッパの原産地から各地に広がり、北アメリカで野生化し、日本でも帰化しているという、生命力、適応力が優れていると云えよう。しかし、雑草的なたくましさを感じられないのは、美しい花と生育のさまを長い間身近にみてきたためであろうか。

この春のアメリカ旅行で、ゴウダソウとの出会いは驚きであり嬉しかった。

スイカズラがジャバニーズハニーサックルという名で呼ばれ、生垣にたくましく繁茂しているのを見た、それも楽しい出会いであった。

(1999. 11. 29. 記)